

## 開催概要

1. 展覧会名称：丸沼芸術の森 25 周年記念展－佐藤忠良の小宇宙
2. 主催：丸沼芸術の森
3. 会期：2008 年 10 月 18 日（土）－31 日（金）（会期中無休）
4. 会場：丸沼芸術の森 展示室  
埼玉県朝霞市上内間木 493-1 TEL：048-456-2533
5. 開場時間：午前 10 時－午後 5 時（入場は午後 4 時 30 分まで）
6. 入場料：500 円（65 歳以上、高校生以下、美術学生は無料）
7. 出品内容：約 30 作品（ブロンズ作品約 20 点、平面作品約 10 点予定）
8. 記念講演会：「彫刻家・佐藤忠良氏とその作品のあゆみ」  
三上満良氏（宮城県美術館 学芸員）  
10 月 18 日（土）午後 2 時より（午後 3 時 30 分終了予定）
10. ギャラリートーク：「飾らない人 佐藤忠良さん」  
舟橋紘一氏（舟橋ギャラリー 代表取締役）  
10 月 25 日（土）午後 2 時より（午後 3 時終了予定）

## ●佐藤忠良氏（1912 年生まれ）について

90 歳代半ばを過ぎた現在も旺盛に制作活動を行う、日本を代表する彫刻家です。

宮城県に生まれ、7歳の頃、北海道に移り住む。小学生の頃から絵が得意で、旧制中学に在籍する頃から画家を志す。中学卒業後は歯科医の書生をしながら公募展に作品を出品、20歳で上京、画学校で学ぶ間に、ロダンやマイヨール、ブールデルなど、ヨーロッパの近代彫刻に感銘を受け、絵画から彫刻に転向。22歳、東京美術学校（現東京芸術大学）に進む。卒業後は舟越保武氏、柳原義達氏らと共に新制作派協会彫刻部の創設への参加、さらには結婚、子供の誕生など、公私とも順調な日々を過ごします。しかし、戦争に突き進む社会状況において、32歳（1944年）で召集を受け、満州で終戦を迎え36歳までシベリアでの過酷な抑留生活を過ごします。そして帰国後はその制作活動を再開します。

1953年には「日本人による日本的日本人の最初の表現」と評された《群馬の人》（1952年作）が東京国立近代美術館に収蔵されるなど、ヨーロッパ彫刻の影響から自立した、日本における彫刻の礎を築きます。その後も、高村光太郎賞や中原悌二郎賞など数多くの受賞歴を持ち、各地に佐藤氏の彫刻が公的に設置されます。さらには1981年、パリの国立ロダン美術館において個展を開催するなど、国際的にも高い評価を得ます。また、1990年には宮城県美術館に佐藤忠良記念館が設立されています。

※《群馬の人》は本展には出品されません。

## ●出品作品について

丸沼芸術の森では1950年代以降の佐藤氏の作品を約100作品所蔵しています。

所蔵作品から〈裸婦〉〈子ども〉〈自然〉のゆるやかなカテゴリーで分類した約30作品を展観します。ささやかな規模ですが、秀逸な作品を身近にご覧いただけます。

### <裸婦>

裸婦像は佐藤氏が長らくテーマとする題材です。1950年代、佐藤氏は自身を他者（モデル）に投影し、人間の内面、個、といった問題を考える作品を多く制作します。そして1970年代以降は「帽子」シリーズに代表される、健康的で若々しい、清らかな印象の裸婦像を発表します。



左から

《やせた女》1954年 ブロンズ 55×23×19.5cm

《はだか》1953年 ブロンズ 95×24×27cm

《帽子・立像》1974年 ブロンズ 143×61×37cm

《立っている裸婦、右手に小鳥》

1985年 鉛筆、紙 35.2×26.6cm

### <子ども>

絵本「おおきなかぶ」の作者としても知られる佐藤氏は、子どもをテーマにした作品も多く手掛けています。そのため一時は作家仲間から「小児科医」と呼ばれたほどです。佐藤氏は常に身近な人々をモデルとしていますが、特に子どもをテーマとした作品には生き生きとした表情と、やさしい眼差しを感じさせます。



左から

《風の子》1965年 ブロンズ 19.5×13.5×7.5cm

《バスタオル》1966年 ブロンズ 41×16×12cm

《冬のこども》2006年 ブロンズ 36.5×8.5×8.5cm

### <自然>

人物と共に、佐藤氏の主要なモチーフとして自然、特に樹木が挙げられます。佐藤氏のアトリエ周辺にある公園の樹木や、庭で採取した植物を丹念に描かれています。これらのデッサンは見るものを魅了し、その植物の生命力と存在感は、時にはエロティックにさえ感じさせます。



左から

《夕焼けの木》年代不詳 水彩・鉛筆、紙 25×17cm

《木》1999年 鉛筆、紙 32×10cm

《わが家の梅》1975年 水彩・鉛筆、紙 24×33cm



